

## せきゆ 石油ランプ

石油ランプは、油壺に石油(灯油)を入れて使用する灯火具です。油を吸った芯に火をつけて、ガラス製のほやで火が消えないように風から守ります。また、調節ねじで芯の長さをかえることで、炎の明るさを調整して使います。江戸時代末から明治時代にかけて外国から日本に伝わり、洋灯とも呼ばれました。石油ランプのあかりは、当時の菜種油やろうそくを使った日本の灯火具「あんどん」や「燭台<sup>しよくだい</sup>」のあかりよりも明るくて、人々は大変驚いたといわれます。床に座る日本の生活様式に合わせて、ランプを床に置いても周囲が照らせるように、専用の台にのせて使用するなどの工夫をして取り入れられ、一般の家庭にも広まりました。置きランプの他に、天井から吊るしたり(吊りランプ)、壁に掛けたりするランプもあります。吊りランプはあかりを下方に反射させるように、笠がついています。

電気による照明器具が普及するまでは、石油ランプは毎日の暮らしを明るく照らす役割を果たしていました。毎日使う石油ランプのほやの内側は、石油燃焼時に出るすすで黒く汚れてしまうため、ほや掃除は手の小さな子どもの仕事でした。

現在では、電気を使った照明器具による「あかり」で、夜になっても昼間と変わらない生活ができ、私たちの暮らしを豊かにしています。しかし今、「光害」として、人の社会生活や自然環境を侵害している「あかり」もあります。日々の生活で本当に必要な「あかり」を見直し、節電を心掛けるなど、あたりまえとなっている「あかり」のある暮らしの意味を顧みることも大切ではないでしょうか。



吊りランプ 岡崎むかし館蔵



置きランプ(台ランプ) 岡崎むかし館蔵